

# 総天然色の未来

《殺意は七色？》

望月苑巳

「少年倶楽部」の付録が欲しかった兄は

ぼくをしたたかに叩いて、それを奪い取った。

母の名さえ知らぬぼくは

恨みという言葉を辞書の中に見つけ

蒲団にもぐって忍び泣いた。

そしてその続編として

ひたすら欲望したのだった

その日、中古の幻燈機は恥ずかしそうに

グレタ・ガルボの大きな胸に雨を降らしている。

カタカタと壊れた傘の骨

足をひきずっている犬

せつなげに。

映画のひとコマのような切手を舐め

人生のひとコマを舐め

宛先のない手紙をだしてから

また忍び泣いた。

一分後正気でいられたら

きっと、兄を殺せたのに。

そんな哲学者のような言葉を

涎みたいに

だらしなく発明する

総天然色なんて

ぼくにとっては遊園地の壊れたブランコ

子供を裏切っても罪悪感さえ生みはしないのだ。

アイスクリームを舐めながら

ぼくは殺意を口の中に甘く溶かしてゆく。